

トップインタビュー

鳥取赤十字病院院長

福島 明氏

この人に注目

鳥取大学医学部生殖機能医学教授

低侵襲外科センター長

原田 省氏

鳥取で活躍する女性医師

独立行政法人国立病院機構

米子医療センター 耳鼻咽喉科

山本 祐子氏

来たれ研修医!

鳥取市立病院

病院探訪

鳥取県中部医師会立

三朝温泉病院

クローズアップ

鳥取の研修医たちの声

KLI NI KOS

とっりの医療

【クリコス】

秋号

2011 autumn



KLINIKOS

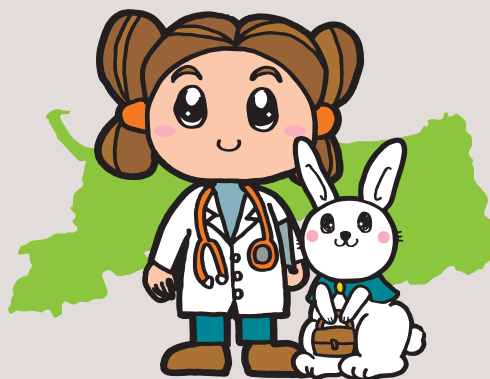
KLINIKOS (クリニコス) ととりの医療

『KLINIKOS(クリニコス)ーととりの医療』は、鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。県内の医療機関ではどのような医師が活躍されているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、すばらしい先生方の取り組みや思いを特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、「臨床講義」や「臨床講義室」を指す言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課



医療の神様
「**大**国主命」と、
神話の地**鳥取県**

小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…。

鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兔」で、傷ついた兔を救った大国主命は、医療の神様とされています。

CONTENTS

<p>トップインタビュー 鳥取赤十字病院院長 福島 明氏 “科学的な態度”は医師には絶対に必要。 常にどうして? と問いかけることで正しい道に導かれる。</p>	4
<p>この人に注目 鳥取大学医学部生殖機能医学教授 低侵襲外科センター長 原田 省氏 山陰地方初の「ダビンチ」導入 診療科の垣根を越えて低侵襲のロボット手術で執刀</p>	8
<p>鳥取で活躍する女性医師 独立行政法人国立病院機構 米子医療センター 耳鼻咽喉科 山本 祐子氏 辛ささえも楽しむ気持ちで無我夢中で取り組めば、 きっと答えはおのずと見えてくる。</p>	11
<p>来たれ研修医! 鳥取市立病院 臨床研修室長、整形外科診療部長・医局長 / 森下 嗣威氏 話を聞きながらカリキュラムづくり。 「広く浅く」「極めたい」をバランス取って研修しています。 とにかくやりたいという前向きな人に来てほしい。</p>	14
<p>病院探訪 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 病院長 / 森尾 泰夫氏 研修医で赴任した時の「活気ある病院」の記憶に押され、 病院の近代化を推進しています。</p>	16
<p>クローズアップ 鳥取の研修医たちの声</p>	18
<p>取材先病院MAP</p> 	
<p>① 鳥取赤十字病院 http://www.tottori-med.jrc.or.jp/ ② 鳥取大学医学部附属病院 http://www2.hosp.med.tottori-u.ac.jp/ ③ 国立病院機構 米子医療センター http://www.nho-yonago.jp/ ④ 鳥取市立病院 http://hospital.tottori.tottori.jp/ ⑤ 鳥取県中部医師会立三朝温泉病院 http://www.hosp.misasa.tottori.jp/</p>	



鳥取赤十字病院院長

福島 明氏

トップインタビュー

Top Interview

Akira Fukushima



科学的な態度は医師には絶対に必要。 常にどうして？と問いかけることで 正しい道に導かれる。

高齢者がすぐにかかれる
地域の中核病院として
急性期医療を提供する

鳥取市には、当院（438床）のほか中核と呼ばれる公立病院が2つあります。鳥取県立中央病院（431床）、鳥取市立病院（354床）です。これだけの病院が集まっているのは、地方の県庁所在地としては、珍しいのでは

ないでしょうか？ 鳥取市の人口はおよそ20万人ですから、機能分担をしていかなくはないけない時期にさしかかっているとは思いません。

当院は、市役所や県庁にほど近い市の中心部にあり、高齢者の方がちょっと歩いてもすぐにかかれる病院ということになれば、ある程度総合的な機能を残した状態で、ほかの病院との連携を図っていく必要があると思います。

ですから、この鳥取赤十字病院は地域の中核病院として急性期医療を提供することを基本にしています。

6年前に院長に就任しましたが、診療から離れて経営に専念するということができない性格なので、いまでも患者さんとの会話を日課にしています。

私が生まれたのは終戦前の中華人民共和国の青島（チンタオ）というところ。戦争が終わって日本に引き上

Profile

ふくしま・あきら

- 1970年 鳥取大学医学部卒業
- 1970年 鳥取大学医学部整形外科教室
- 1975年 立正佼成会附属佼成病院整形外科
- 1986年 松江市立病院整形外科
- 1990年 鳥取赤十字病院整形外科部長
- 2001年 鳥取赤十字病院副院長
- 2005年 鳥取赤十字病院院長

げてきて、父親の仕事の関係で鳥取県の境港に長く住んでいました。

高校3年生で将来の進路を決める段階で、建築関係に進みたいとおぼろげながら考えていたのですが、団塊世代の一つ前ということで、現役で大学に合格しないと大変になると周りから言われていました。担任の教師から「おまえは医者に向いている」と言われたこともあって(笑)、当時最も近い鳥取大学医学部を受験し合格しました。

整形外科を選んだのは 小学4年の骨折治療が影響 そのまま大学の医局に

医学の中でも整形外科を選んだのは、小学4年生に起きたあるできごとが影響しています。体育の授業だったのですが、サッカーのまねごとをしていて、左腕を骨折しました。治療はしてもらったのですが、変形治癒したために、矯正手術の必要が出てきてしまいました。

その時に鳥根県の玉造厚生年金病院に連れていかれたのですが、その病院の整形外科を担当していた院長先生に、手術してもらおうことになったと記憶しています。そのときから、整形外科医になんとなくあこがれていました。

整形外科はいわゆる運動器を扱う科目ですが、ほかの科に比べると原因と結果がはっきりしているのも、私の性に合っていました。また、人の日常生活を直接的に手助けできると感じたので、整形外科を選びました。

そのまま鳥取大学の整形外科の医局に入りましたが、1975年に東京の立正佼成会附属佼成病院に就職し、そこで11年間勤務いたしました。

この病院の整形外科は、大学の関連病院の色合いがあまりなく、部長先生は東京大学出身でしたが、鹿児島大学や信州大学、千葉大学、東京慈恵会医科大学などいろいろな大学の出身の人がいましたので、楽しかったですね。また、近隣のいろいろな病院の先生方と月1回のペースで症例検討会もやっております。

鳥取で最初に始めた ガンマナイフ法の治療 全国でも有数の症例数に

その後、個人的な状況の変化や母校からの誘いもあり、1986年に鳥根の松江市立病院に移りました。それから、3年強たったところに、出身教室から鳥取赤十字病院の話が来まして、この鳥取赤十字病院に移ることになりました。

こちらに移って新たに始めたこと

は、大腿骨近位部骨折にガンマナイフ法を使う治療です。鳥取市内では鳥取赤十字病院が最初だったと記憶しています。一時、この治療の症例数が全国で5番目ぐらいになっていたこともあります。「この病院に来るとガンマナイフ法を指導してもらえろ」という話が、研修医を通じて広がっていったことがあります。今ではこの治療は主流になっていきます。

研修の成果は 症例数の多さではない 関連する知識を広く勉強

進路に迷われている研修医の先生方に申し上げたいことがあります。どのような選択をしても、自分で決断したことであれば、後悔することはないということです。大事なものは、岐路に立ったときに自分自身で決断するということです。

また、都会の大きな病院で研修したがる人が多いですが、研修の成果は症例数の多さで決まるわけでもありません。確かにいろいろな種類の症例を経験できますが、すべてを経験できるわけではありません。手術も同じで、たくさん手術したらうまくなるというものでもありません。

要は、一例一例を術前から術後まで繰り返しシミュレーションして、関連



院長室には、赤十字の創始者 アンリー・デュナンの肖像(左写真)を含め、数々の絵画が飾られている

する知識を広く勉強していくことで上達していくのです。また、知識を広めることは今まで習得している他分野の多くの知識をつなげていくことにも繋がりが、様々な疾患にも対応できるようになるのです。

私たちが卒業したころのように臨床研修制度がなかったときは、診療内容を詳しく理解してからというよりは、クラブの先輩から誘われたり、ポリクリの時に親切にしてくれたなどの理由で、進路を選択することも少なくありませんでした。

しかし、いまはしっかりした制度がありますので、2年で診療科目を一巡でき、適性も見極めやすくなっていると思います。ただ、手技の面では、指導医が責任を持ってどれくらい研修医にさせるかが重要になってきます。現在鳥取赤十字病院では、6人の研修医が研修中ですが、手技については、なるべく研修医自身にさせるようにしています。

流されるように 研修を受けてはだめ 自分から積極的に技能習得

臨床研修（初期研修）2年間の経験が将来に直接役立つというものでもありません。とにかくこの2年間は「いろいろなことをやった」ということが

大事なことです。この期間で総合的に患者さんを診ることができるようになるのが、本来の目的だと思いますが、たったの2年ではそこまで到達しないと思います。

そうは言っても、流されるように研修をしていては、全くだめです。積極性が絶対に必要です。学生の間は、教えられた知識をいかに吸収するかが重要ですが、医師になったら、自分から技能をどれだけ習得するかが大事になってきます。

例えば、患者さんを診てわからないことがあれば、調べたり聞いたりして、すぐに解決していかなくてはいけません。前向きな姿勢がどうしても必要になります。

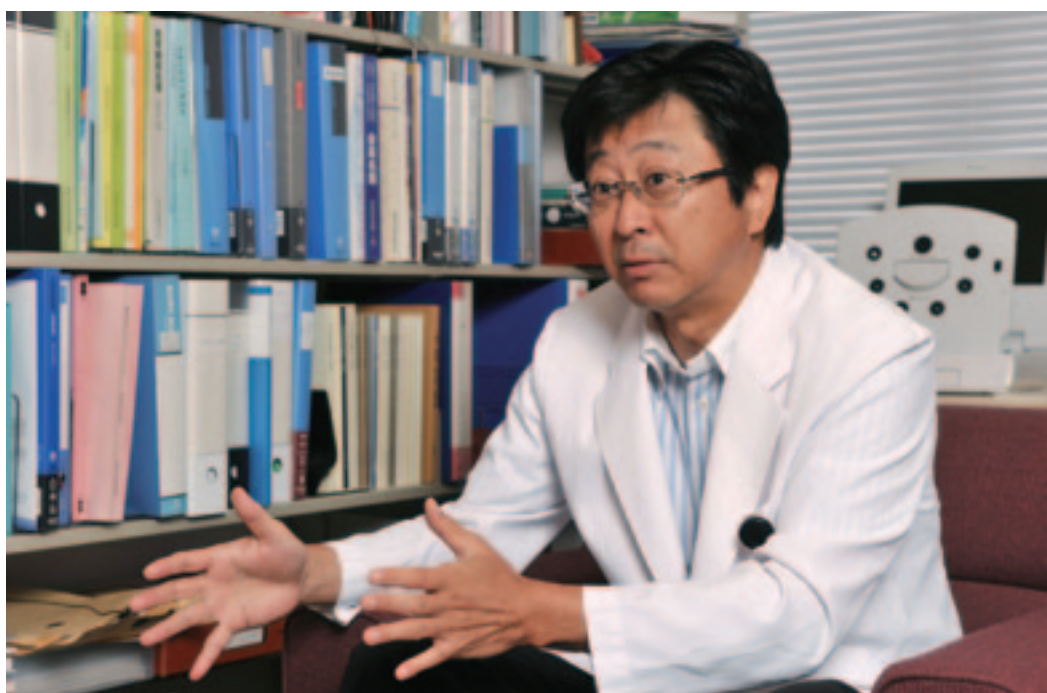
自分で一生懸命追究することができるようになると、今度は研修を受けている病院だけでは足らなくなることが必ず出てきます。当院では、ほかの全国の赤十字病院も含めて国内留学を許可しています。海外でも3ヶ月ぐらいであれば許可します。それぐらい熱意があれば、経費も病院で持つことぐらいは考えています。

自分の行った医療が「正しかったか」「有効であったか」と常に問いかけて続けることが重要です。正しいと思っただけで、実は間違っていたということも、ままあるのです。そうい

う意味では、物事を客観的に観察して、そこからいろいろなことを導き出し、それを活かせるようにする「科学的態度」は、医師には絶対に必要な資質だと思えます。



この人に 注目



山陰地方初の「ダビンチ」導入 診療科の垣根を越えて 低侵襲のロボット手術で執刀

鳥取大学医学部生殖機能医学教授
低侵襲外科センター長

原田 省氏

鳥取大学では2010年8月にダビンチ・サージカルシステム (da Vinci Surgical System) を導入、

2011年4月に低侵襲外科センターを設置して、

診療科の垣根を越えた新しい手術の時代をリードする。

鳥取大学医学部附属病院の低侵襲外科センター長に就任した原田省氏に、

ミクロの決死圏(医療チームを縮小して体内に送り込み、

脳内部から手術を施す往年のSF映画)の世界を

再現するかなのような話を伺った。

腹腔鏡や胸腔鏡など鏡視下の手術では、術者が通常鉗子をお腹の3ヶ所く

らいに入れて、モニターを覗ながら行

います。患者にとっては開腹手術と違

って、小さな穴を開けられるだけなの

で負担が少ないのですが、術者は2〜

3時間も立ったまま、鉗子をつかんで

回すだけの動きなので結構大変です。

しかし、ダビンチは違います。鉗子

の先端部はつまみになっていて、組織

をつまんだり針を把持する機能があつ

て、好きなように自由に動きます。ま

た「手首」のように、つかんでぐるぐ

る回すこともできますので、微細な動

きも可能です。さらに腹腔鏡手術では

時間が経つと手が疲れて鉗子もぶれが

ちですが、ロボットアームなのでぶれ

ることも一切ありません。

座りながらコンソールボックスを覗

き込み、ハイビジョン3D(立体)の

映像を見ながら作業します。私たちは

婦人科医ですので子宮や卵巣の手術が

多く、まるで患者さんのお腹の中に頭

を入れたような感じで手術をします。

国内では20数台が導入され、婦人科で稼働するのは全国でも鳥取大学と東京医科大学だけ(2011年7月現在)。鳥取大学では婦人科以外に胸部外科、泌尿器科の手術でも採用している。

現状では腹腔鏡や胸腔鏡で行っている手術の代わりにダビンチで手術をします。腹腔鏡手術と比べ、傷の大きさや数は同じですが、体内での操作はダビンチの方が緻密にできます。鉗子の動きだけでなく、3D視野で毛細血管も見えます。電気メスで毛細血管まで止血でき、少ない出血で手術ができるのです。ダビンチが作る3D視野は、スコープを体内に2本入れることで、位置の異なる2ヶ所の画像を合成して作られます。コンソールから覗く世界はとてもしリアルな3Dの世界です。

実際の手術現場を覗くことはできないが、ダビンチの手術動画を収録したビデオがある。3Dメガネをかけて視聴すると生々しい人体世界があった。

原田教授「ここが子宮でこれが筋腫です」

取材班「ずいぶん大きいですね」

原田教授「太さ10ミリほどのカメラをおへその上から入れてます。鉗子が入ります。右手に鉗、左手は電気メスです。おへそから下の方を見えています」

取材班「よく見えるものですね、血管

の一本一本がわかります」

原田教授「ダビンチのコンソールから覗いたらもっときれいです。これは毛細血管ですが、開腹手術では見えませんし、鉗でどんどん切っていくので、どうしても血がにじみます。でもダビンチで手術すると電気メスで凝固してしまうので、血はほとんど出ません」

取材班「輸血も少なく済むのですね」

原田教授「はい。本当に骨盤の中に頭を突っ込んでいる感じでしょう」

取材班「まさに：」

原田教授「ここでポコポコしているのが子宮動脈です。これを止めておいて、子宮を取っていきます」

息をのんだ画像は鮮明。だがダビンチ画像はさらに鮮明である。医師はコンソールの前に座り、ロボットアームを遠隔操作するフィンガーチップを動かす、アクセルとクラッチのような操作でペダルを踏む。患者も麻酔医や助手も、医師から離れた位置にいる。

私も手術されるのであればダビンチでしてほしいですね(笑)。手術の後が全く違います。婦人科の手術をしようと思えば、10センチほど切らないと手が入りません。しかしダビンチならこんな小さな穴が3、4ヶ所開いていればいいのです。開腹手術では術後2日はベッドから動けません、ダビン

チですと翌日にはトイレまで歩ける状態になります。食事も流動食なら可能です。尿の管も翌日の朝まで入れていれば大丈夫です。

ダビンチは手術技術を標準化すると言われるが、習熟までには実践トレーニングが欠かせない。

使い始めるときは、実験動物を使ったトレーニングを受けることになりました。須賀川(福島県)にトレーニングセンターがあり、医師2名、看護師2名の4名で動物トレーニングを行い、その後ダビンチの手術に習熟する施設に見学に行きます。日本国内には婦人科の該当施設がありませんので、大韓民国の大邱(テグ)広域市にある慶北大学病院まで行きました。韓国は混合診療が進んでおり、日本よりもダビンチ手術が普及しています。トレーニングを受けた後、ライセンスをもらい手術ができるようになります。

山陰地方では初の導入。これまで半年、手術実績を積み重ねてきた。

件数が多い手術は婦人科と泌尿器科で、特に前立腺がんは膀胱の奥、骨盤の一番深い所まで切り進めなくてはならないので、ダビンチ向きです。当院ではこれまでに婦人科9例、泌尿器科が20例ほどで、ほかに胸部外科、消化



この人に 注目

器科での手術を加え全体で50例ほどの実績を積んできました。山陰では鳥取大学だけですし、国立大病院で症例数は一番多いのではないのでしょうか。

さらに、これまで腹腔鏡でも不可能だった手術ができる可能性もあります。例えば子宮がんはダビンチが使えるといいと思います。腹腔鏡で行うのは非常に難しいため、当院では開腹手術だけ行っていました。

国立大学では「診療科の壁」が高いと言われている。お互いに手術を見る、アドバイスをするなど、他科と関係を持つことは少ない。ダビンチの導入も診療科ごとの採用が普通だが、ここ鳥取大学のように、「低侵襲外科」として診療科横断的に取り組むのは珍しい。

低侵襲外科センターによって診療科の壁を低くしたいと考えています。センターでは、病院内規に基づき、手術する執刀医と術式の審査を行います。次に手術自体をコントロールします。例えば子宮の全摘手術なら標準では3時間半ぐらいかかります。もしその手術が6時間経過しても終わらないような場合は、低侵襲外科センターの権限で手術を中止し、ダビンチから腹腔鏡手術が開腹手術に切り替えるように提言します。命令とまではいきませんが、画期的なことだと思っています。

ダビンチの手術検討会も始めました。前月のダビンチの手術のビデオ録画を流し参加者全員に見てもらい、手術の知識を深めてもらいます。診療科が違えば鉗子の種類や使い方も違ってきますので、使い方の違いや新しい応用などに気づけます。やり方こそ違いますが、同じ機材を使っているからこそ、情報交換ができるのです。

ダビンチは元々ベトナム戦争当時、遠隔地にいる医師が傷病兵を治療するために開発が進められた。鳥取大学が導入したモデルは「S」。最新鋭の「Si」ではコンソールを連結して複数の医師が共同で手術にあたることまでできる。将来的には遠隔手術も夢ではないが、ロボットゆえの問題もある。

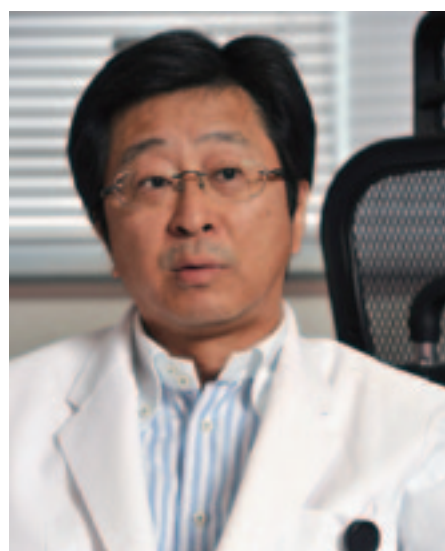
完全に安全とは言えません。ダビンチはやっぱりロボットだなと思うのは、とても力が強いことです。手首があるので糸は結びやすいのですが、力が強いのでバチンと切れてしまうことがあります。腹腔鏡の鉗子で引っ張って切ろうとしたら至難の技でした。

また臓器に触っている感覚が手に伝わらないので、膀胱を圧迫した死亡事故が他の病院で起きています。腹腔鏡の鉗子なら「あまがみ」のように力の加減を調整できますが、ダビンチの鉗子は触覚が伝わりません。目で見てど

のくらいの強さで押さえているのか、経験を積まないと危険です。

またコストも大きな課題である。国内のダビンチの医療機器承認は2009年喜れて、まだ保険適用になっておらず、先進医療保険などでカバーするケースが大半となっている。普及には国の後押しや保険適用が欠かせない。

まだ婦人科では、子宮の悪性腫瘍手術の腹腔鏡使用は保険適用になっていません。全国数ヶ所の病院が患者の自己負担でやっているようです。この手術がダビンチでできるようになれば、悪性腫瘍手術も様変わりするでしょう。米国の病院では、ダビンチで1日数例のペースで子宮全摘手術をやっているようです。未来医療が現実のものとなる。そのためにも国の後押しがぜひ欲しいですね。



Profile

はらだ・たすく

- 1983年 鳥取大学医学部卒業
- 1983年 鳥取大学医学部産科婦人科学教室入局
- 1985年 英国リーズ大学留学 体外受精技術習得(4ヶ月)
- 1989年 鳥取大学医学部助手
- 1992年 大阪大学医学部内科学第三講座国内留学(1年)
- 1993年 鳥取大学医学部講師
- 2007年 鳥取大学医学部准教授
- 2008年 鳥取大学医学部教授
- 2011年 病院長特別補佐 低侵襲外科センター長

鳥取大学医学部附属病院低侵襲外科センターの問い合わせ先

鳥取大学医学部附属病院
低侵襲外科センター

〒683-8504
鳥取県米子市西町36-1
TEL: 0859-33-1111 (電話番号案内)





辛ささえも楽しむ気持ちで
無我夢中で取り組めば、
きつと答えはおのずと見えてくる。

独立行政法人国立病院機構 米子医療センター 耳鼻咽喉科

山本 祐子氏

Profile

やまもと・ゆうこ

- 1998年 鳥取大学医学部医学科卒業 第1子(長男)出産
- 1999年 鳥取大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科入局
- 2000年 第2子(次男)出産
- 2007年 第3子(次女)出産 独立行政法人国立病院機構
米子医療センター 耳鼻咽喉科
- 2010年 第4子(次女)出産

鳥取で活躍する
女性医師

Yuko Yamamoto

周囲の協力があつたから 夫婦同業でありながら 4児をもうけられた

女性一人当たりが生涯に出産する子供の数は年々減少し、2009年のデータでは1.37人と、少子化問題は依然、深刻な状況である。それは女性の社会進出が進んでいるにもかかわらず、出産、育児に関する制度が十分ではないことが一因であろう。

ところが、4人の子供の出産、育児をしながら、とてもエネルギーに働き続けている女性医師が鳥取県にいる。それが山本祐子氏だ。

中学1年生の長男、小学5年生の次男、3歳の長女、0歳の次女の母という顔と同時に、医師の顔も持っている。

「4人ももうけられたのは、やはり周囲の方々のおかげですね。私の場合、上司、同僚、保育園の園長先生など、子育てをサポートしてくれる人たちに大変恵まれていました。

特に現在、鳥取大学医学部附属病院の病院長を務められている北野博也先生の存在は大きいですね。

第3子の産休前、当時、直属の上司だった北野先生に挨拶に行ったときのことです。私が『長期に休んでご迷惑をかけてしまい申し訳ない』と申した

ところ、『誰も迷惑なんて思っていないから、気兼ねなく出産してきなさい』と背中を押してくださったのです。

そんな方がトップにいらっしゃったせいか、同僚もとても理解があり、私の代わりに子供のお迎えや、ちょっとした世話などを手伝ってくれました。

また、子供を預けていたある保育園の園長先生が、私のバックグラウンドを知って、一時期、時間外でも面倒をみてくれたのは本当に助かりました。

園の隣に住まわれていた園長先生が、ご自宅に子供を連れて帰って、深夜まで預かってくださったってことです。

あたたかく見守り、手を差し伸べてくれる方々に恵まれて本当にありがたく思っています。

現在では鳥取大学医学部附属病院の保育所が24時間保育をはじめするなど、支援が充実してきたので、働きながら出産、育児をする環境はかなり整っているとと思います。

それに、北野先生をはじめ上層部の方々の多くが、出産、育児のしやすい環境を整えなければならぬと強く意識されているので、支援に関する制度は、これからもさらに充実していくのではないのでしょうか」

山本氏が仕事と育児を両立し続けられるもう一つの大きな理由として挙げたのが、夫の強い支えである。

「夫は鳥取大学医学部の同級生で、今は外科医をしています。当直やハードな手術が多いにもかかわらず、家事や子育てに積極的に参加してくれるのでとても助かっていますね。喧嘩をすることもありますが、互いの言い分を主張し、あとはわだかまりなくまた元の仲に戻る——そんなすつきりとした関係を築けているので、どちらかがストレスを抱え込むことなく、気持ちよい家庭生活を送れています」

医師の顔のときは 全身全霊で 患者さんと向き合う

医師として働きながら、4人の子供を産み育てていることで耳目を集める山本氏だが、仕事に対するプロ意識は高く、妥協を許さない強さも持っている。

「周囲からの助けがあることは本当にありがたいのですが、それに甘んじて手を抜くことはあってはなりません。職場に出たら、医師として全身全霊で患者さんと向き合うこと。それが命を預かる者としての責任です」

そう厳しく語る一方で、自分の働き方を可能な部分ではコントロールするのも大切であると言う。

「現在、月、水、金は、非常勤で独立行



政法人国立病院機構米子医療センターの耳鼻咽喉科で働き、火、木は産業界として検診等を行っています。

医師としての第一歩は鳥取大学の耳鼻咽喉科で踏み出したのですが、大学院時代の病理学教室で産業界に出会い、認定産業界の資格を取得しました。

産業界の役割とは、検診や労働環境の改善であり、今の日本には欠かせないものです。

欧米であればバカンスなどでたっぷり時間が取れるときに自分の体を顧みるのですが、日本人の多くは、昨今の厳しい社会情勢のためもあるのでしょう、仕事や家事など日々の生活に追われ、自分の体に目を向ける機会が非常に少ない。そのため大掛かりな治療が必要になる段階になって初めて異変に気づく人が多く、結果的に国家予算における医療費の増加につながっています。

鳥取で活躍する 女性医師

Yuko Yamamoto

まうのです。

人々の健康が保たれることは、医療費という国家的な問題のためもありますが、何より人々が充実した毎日を送るために必要不可欠です。私はそこに携わることに大きなやりがいを感じています」

辛ささえ楽しむ したたかさを 持つてほしい

耳鼻咽喉科の医師を務めながら、新たに産業医としての道を開き、さらには4人の育児もこなす山本氏。周りからの支援があったとはいえ、苦労したこともあっただろう。

「大学卒業の直後に出産し、どこの医局にも入らずに育児をしていました。そして卒業してから1年後に鳥取大学の耳鼻咽喉科に入局。

妊娠がわかるまでは、手術中の緊張感や活気に魅力を感じて外科を志望していたのですが、外科に入局した夫の姿を実際に見て、とても育児と両立するのは難しいと、考え直さざるをえなくなりました。

そこで、目をつけたのが耳鼻咽喉科でした。アレルギー性疾患や中耳炎などの治療のイメージが強いのですが、ダイナミックな外科的手術もしばしば

行う科です。外科に比べれば当直も少ないですし、ここならば自分の志望に比較的近い仕事ができるのではないかと考え、入局を決めました。

そして入局から約1年半後に第2子を出産。このときの職場復帰後が最も大変だったと思います。入局1年目ですと、比較的軽い疾患の患者さんを診ることが多いのですが、2年目前後からは、悪性腫瘍の患者さんの担当や、何時に終わるかわからない手術などが増えてきます。

当時はまだ24時間保育が行っている保育園がなかったので、夫婦そろって当直に当たってしまったときは本当に困惑しました。このときは、車で片道

2時間程度の鳥取市に住んでいる夫の両親に面倒をお願いしたのですが、鳥取市まで子供を送ってから、とんぼ返りして日勤、当直をこなし、さらに翌日に日勤をした後に、子供を迎えに行くという手段でなんとか乗り切りました。今から考えてみると、なかなか大変なスケジュールでしたね。しかし、自分自身はそれほど辛く感じていなかったと思います。

ただ、子供には負担になってしまっただようで、チツクの症状が出たり、なかなかおねしょが治らなかつたり——何が起こるたびに深く悩んだものです。ときには、母親としてのキャリアの長い看護師さんに泣きながら相談を持ち

かけたこともありましたが、山本氏の口調は終始明るく生き生きとしている。

「患者さんのことで涙したり、子供のことで悲しんだり、医師であり母でもある者は、辛い思いをする機会は、決して少なくないでしょう。でも、そんなときこそ踏ん張って懸命にやっていたら、辛いエピソードもいつかは笑って話せるようになるものです。

どうしても自分の進むべき道が見つからないときも、目の前の仕事を無我夢中で取り組んでいると、ぱっと答えが見つかったり、よいお話が舞い込んできたりするもの。渦中にいるときは辛いと思いますが、その辛さも楽しむつもりで取り組んでみてください。

きっと道は開けます。それに私は、海のない群馬県から来ました。美しい海と大山の風景、特に冬の荒波には圧倒されましたが、穏やかで温かく、私のことを家族のように面倒見てくれる人情味あふれる環境に助けられ、生活も子育ても楽しんでいます」

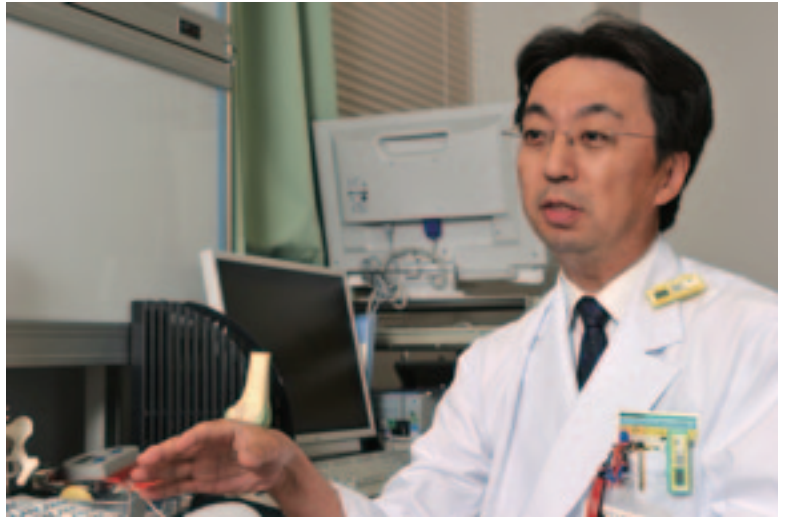
とても頼もしい先輩女性医師が鳥取県にいる。その事実は、これから鳥取県で医師の道を歩み出そうとしている女性たちの背中を押し、勇気づけることだろう。



来たれ
研修医!

鳥取市立病院

大都市病院の臨床研修では学べない“テーラーメイド”の研修。
どんな医師になるか膝づめで語り合い、最初から専門医を目指すのではなく、
診療科をまたぎ初期診断や治療ができる医師を目指す。
大き過ぎず小さ過ぎない鳥取市の人々の健康と暮らしを、常に視ることができる。
鳥取市立病院臨床研修室長の森下医師にその魅力を伺った。



Q 鳥取市立病院の臨床研修の特徴は何でしょう。

当院は高度医療も提供していますが、地域に密着していて、具合が悪くなった患者さんがぼつと入って来られる病院でもありますので、両方の臨床研修をやっています。

また、大学病院のように県外の病院とコラボレーションしていない代わりに、県内のほかの3臨床研修病院と連携しておりますので、研修の一部をそ

話を聞きながらカリキュラムづくり。「広く浅く」「極めたい」をバランス取って研修しています。とにかくやりたいという前向きな人に来てほしい。

臨床研修室長、整形外科診療部長・医局長

森下 嗣威氏

の連携病院で実施する多面的な体験もできます。何しろ研修医さんの数が多くはないので、決められたカリキュラムだけでなく、一人ひとりの話を聞きながら、要望や希望、

模索している方向などを活かしながら丁寧にカリキュラムを組んでいくようにしています。

例えば「整形外科を究めたい」と言えます。整形外科医用のプログラムを組めます。他の科で研修しながらでも、整形外科と一緒にやる時間帯を作って、目指す方向性、興味のあることを満足させながら、同時に決められた研修もやっていただきます。「広く浅く」と「究めたい」、両方のバランスを取っています。

Q まさにテーラーメイドです。必須の研修とやりたい研修とは、どのような割合でしょうか。またどのくらい自由度があるのでしょうか。

臨床研修として必修科をおよそ1年かけてやっていただきます。研修医に言っているのは「やりたいことをやるのは初期研修が終わってからでもできます。今しかできないことをやる時期なのです」と。将来的に整形外科に進みたいのであれば、眼科や皮膚科、泌尿器科の勉強は今しかできません。臨床研修で勉強することで、幅広くいろいろなことがわかるようになるのです。次の1年は個人の裁量で行えることも多くなります。

一番のポイントは、いかにその人が

目指しているものを見つけたかです。いろいろな選択肢を示してあげるのも大切だし、辛い話ばかりしても仕方ありませんから、彼らの人生に希望が持てるような選択肢をお話するようにしています。研修医ごとに個性を考え、ぐつと食いつきそうなことを考えるようにしています。



Q どのような研修医が来られますか。またどのような人に来ていたかったですか。

体育会系もいれば、文科系もオタク系(笑)も来られます。一括りにこういうタイプということはありません。鳥取県出身で県外の大学に進学し、地元



に研修に戻るパターンが多いです。でもここに初期研修にきた後も、ずっと縛り付けるということはありません。ここを足がかりにして、どんどん成長してもらいたいです。鳥取の出身だから「いずれ故郷に帰ってくるのだよ、故郷のために働くのだよ」ということは絶えず言うようにはしています。

何かまだわからないけれど、とにかくやりたいという前向きな気持ちを持っている人に来てほしいです。自分から動く人は、気持ちの面でも行動の面でも、時にはちよつと暴走するところもありますが、成長することが多いのです。走らない子を走らせるのは大変なのですが、走っている子を良い方向にもっていくのは雑作のないことです。オタク系の人も、居場所を与えることが開きます。大変ですが、それぞれ適材適所がありますのでそれを見つけてあげたいです。

Q 鳥取で医師として働くよさとは何でしょうか。

故郷で働くということでしょう。帰ってくれば、自分が役立って、故郷に貢献する実感を持ちながら仕事ができますから。

都会ですと、一歩病院を出れば「あんた誰？」という話になってしまうで

しょうが、こちらでは、どこに行っても「やあ先生」という話になります。社会が小さいので、この地域の医療が全部わかるのです。患者さんの居場所も分かるので、目配りもしやすいです。ぼくらの年齢になれば、臨床の仕事も研修指導もしますし、行政との話も出てきます。地域の医療行政のことも見たせるので、自分たちがこの地域で医療をしているのだな、という実感があがり、医療が社会を側面から動かし、ている手応えも感じられます。

Q 今いらっしゃる研修医さんはいかがでしょう。

今年度の研修医は、一人っ子なのですが、今麻酔科に行っていて手術室にいますので、オペの時には必ず会います。手術しながら「最近どうしてる？ 何やっている？」と声をかけています。患者さんは全身麻酔をかけていますから、ぼくらが何を話しているのかわかりませんが(笑)。

外に飲みに行ったりもします。病院の中での顔とは別に、プライベートの顔をお互いが突き合わせることができそうです。医師ってこういう生活をするのだということを肌で感じてほしいのです。私たちがばかり、院内で偉そうなことを言っているのは不公平ですから。



森尾泰夫氏

研修医で赴任した時の 「活気ある病院」の記憶に押され、 病院の近代化を推進しています。

穏やかになる。岸に降りて水に触れたくなる。自然のやさしさが残った岸が、川湯において人を惹きつける。三徳川はやがて湯けむりを上げる三朝（みささ）温泉街にかかり、目的地の三朝温泉病院を案内してくれた。

■「温泉の医療効果というのはなかなか難しく、一般のお風呂とどう違うのかということも説明しにくく、わかっていないことも多いのです。ただ皆さん、リピーターで何度も来られることは、何か身体に良いことがあるのではないですか」

病院長の森尾泰夫氏は、医師らしくない口ぶりでニコニコと話を始めた。都会の医師にはない、人をつつみ込む自然な優しさを感じる。

三朝温泉は高濃度のラドンを含む世界屈指の放射能泉。ラドンとは低線量の放射線で、浴びると新陳代謝を活発にして免疫力や自然治癒力を高める効果があるといわれる。地元患者だけでなく、療養を兼ねて滞在する湯治客も温泉治療効果を求めて三朝温泉病院

にやってくる。

「温泉地にある病院ですから温泉街の繁栄も支えたいという想いもあります。幸いこの病院は自前で温泉泉源を持っていて、合計5ヶ所から毎分250リットルも汲んでいます。温泉掛け流しの浴室で入浴していただいたり、温泉プールではさまざまな運動療法に使っています」

効能がわかっていないと言いながらも、森尾氏らは、温泉を利用したりハビリ療法の効果を学会誌にも発表している。温泉・温水のもつ浮力が歩行訓練を容易にし、静水圧が血流を促進する。運動によるほどよい負荷もあり、温熱による代謝促進や組織改善など、多くの効能がある。隣接する岡山大学病院三朝医療センターと共に、三朝温泉が提供する『現代湯治』リゾートにおいて、滞在型の健康増進施設、医療ツーリズムの中心施設として利用されている。

三朝温泉病院の院内には、運動療法を行う広々とした温泉プール、歩行や関節機能の回復、車いすへの移乗訓

■「こういう川岸は関東ではほとんど見かけなくなりましたね」。同行のカメラマンが言う。取材班が乗るクルマは、JR倉吉駅から南に下り、山間の道を進む。道を東に折れるところから、右手に伴侶のように川が寄り添ってきた。その川岸の豊かな緑と自然な石床が、車窓から見え隠れする水面と溶け合っている。確かにこんな川に久しくお目にかかっていなかった。都市の川は自然も人の心も制御する物質で固められていて。人を寄せ付けまいとする。一方この三徳川は、観ているだけで

病 院 探 訪

鳥取県中部医師会立 三朝温泉病院

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院（以下三朝病院）院長の森尾泰夫氏は、「温泉そのものは西洋医学と薬剤だけでは治せない部分を補い、温泉地の気候や風土は患者さんの心を癒してくれる」と温泉治療の効用を説く。現在週3日は病院に寝泊まりし、病院機能評価、新病棟建築工事の推進、電子カルテの導入とDPC対象病院への移行など、病院の近代化に力を注いでいる。

練、言語リハビリなどを行う施設がある。どこでも穏やかな笑顔の作業療法士や理学療法士が迎えてくれる。自立して歩こうと力を出す高齢者も、関節手術した患者も必死で頑張っている。のどかだが医療技術に裏付けられた施設である。

■三朝温泉病院は日中戦争に端を發した戦時中の昭和14年に、傷痍軍人の療養病院として開設された。その後厚生省に移管され結核療養施設として利用されていたが、国立病院・療養所の再編を機に鳥取県中部医師会に委譲された、鳥取県唯一の医師会立病院である。

「私は25年ほど前、研修医としてこの病院に勤めていました（84年から88年まで）。当時は国立病院でした。その後鳥取大学に勤務し、2003年、15年ぶりにこの病院に帰ってきました。国公立病院との大きな違いは、赤字を出せないことですね（笑）。でも自治体病院のように不採算科目がないので、若干気が楽です」

鳥取県内からの患者が9割、岡山や関西などの県外から1割。患者の目的は大きく2つに分かれる。術後のリハビリテーションが目的の滞在患者と慢性内科疾患の急性憎悪で入院する患者である。温泉治療だけでなく、常勤医

5名がいる整形外科では、坐骨神経痛など脊椎脊髄疾患、関節リウマチなどを専門に、年間手術件数は392件（2010年度）に上る。急性期と回復期を併せ持つ総合サービスが特徴でもある。経営主体は時代と共に変化してきたが、温泉を利用した医療サービスの根本は変わっていない。

■「温泉そのものは西洋医学と薬剤だけでは治せない部分を補い、温泉地の気候や風土は患者さんの心を癒してくれるのです。どんな手術も温泉が癒してくれるのです」

そう話す森尾氏であるが、医師になりたいと思っただけは「自由業」への憧れからだろう。

「高校生のころ、何になろうかなと考

人のために尽くすなんて
最初は考えていませんでした。
でも自然と使命感がすり込まれます。

えて、あまり人から使われず、自由に生きていける職業がいいなと思ったのです。でも生活もできないといけませんので、医師を目指して、医学部に進学しました。人のため尽くすことなんて、最初は考えていませんでしたが、医学部に入ると、医師としての使命感が自然とすり込まれます。こうして『普通』の医師になることができました」

控えめに語る森尾氏だが、赴任に際しては研修医の時の「活気ある病院」という記憶に後押しされたという。

「請われたら尽くしたいと考え、そんなに遠くに行かなくても」という米子に住む家族の反対を押し切って赴任した。院長就任時から「禁煙」を宣言し、病院機能評価の実施（2004年、2009年）、新病棟建築工事（2011年着工）の推進、電子カルテの導入とDPC対象病院への移行（2012年より）など、週3日病院に寝泊まりしながら病院の近代化を進めている。

「お風呂はこの病院の温泉に入りま



運動浴を行うためのプールの前で

鳥取県中部医師会立三朝温泉病院の
見学などのお問い合わせ先
鳥取県中部医師会立三朝温泉病院
〒682-0197
鳥取県東伯郡三朝町山田690
TEL：0858-43-1321 / FAX：0858-43-2732



す。家に入るよりも広くていいですよ」
古くから、与謝野晶子夫妻や野口雨情などの文人に愛された三徳川のせせらぎを聞きながら、三朝温泉病院が鳥取県唯一のリハビリテーションセンターになるという確信をもった。

この三朝温泉を舞台にした映画「恋谷橋」が11月から全国ロードショーされます。恋谷橋は三朝温泉を流れる三徳川にかかる橋の一つで、フランス大使が命名した橋だそうです。三朝温泉病院も映画に登場します。

鳥取の 研修医たちの声

病院全体で研修医を育てようとする姿勢 その気持ちに応えられよう精進いたします。

山陰労災病院研修医

戸田 直樹氏

当院は383床の中規模病院であり、いわゆるcommon diseaseを抱えた患者さんが多く来院されます。初期研修が始まり5ヶ月が過ぎようとしています、たくさんの症例をバランス良く経験させていただいています。

研修プログラムの特徴は、以下の3点。

①救急研修は月に2回程度、土日の救急外来での日直を2年間通して行うこと。肉体的・精神的に負担の大きい夜間当直の義務がないこと。(宿直については各自が自主的に指導医の先生と一緒にしています)

②2年次の12ヶ月は自由選択制で融通が利くこと。個人の要望に沿ってプログラムを組む事ができること。

③各科研修終了時や日直ごとに経験した症例や指導医からのコメント等をportfolio(レポート)に記載することで、今までどれくらいの経験を積んだかが一目で分かること。

当院では指導医の先生だけでなく、病院全体で研修医を育てようという姿勢を強く感じます。その気持ちに少しでも応えられよう、精進したいと思います。



「研修医がいる病院」という文化で 研修医の独自活動を受け入れてくれる。

鳥取県立中央病院1年次研修医

椋田 権吾氏

県立中央病院には、「研修医がいる病院」という文化があり、みなさんが教えてくださるという気風があります。このことは研修医にとって大変ありがたいことです。

市中病院であり三次救急も

初期研修の目標は志望科に限らず基本的な医療を提供できる医師になることです。高頻度の疾患に多く出会う当院のような市中病院こそ目的に合致していると考えます。三次救急となっているので、軽症も最重症も受け入れます。両者を見るからこそ研修が幅広くなります。

業務・時間バランス

激務に追われ経験だけで仕事をこなす

研修ではありません。反芻・吟味する時間があるからこそ整理された知識・技術になります。

学ぶ・教える

このような環境で1年先に学ぶ2年次の先輩が多数います。1年次の私達が彼らから学ぶ知識技術は何よりの糧となります。また2年次の先輩にとっても教育することが非常に学習になるといいます。

自主性の尊重

私達1年次は自ら企画立案した朝のあいさつキャンペーンを始めまし

た。2年次の先輩は勉強会を開催しています。そして、それらの活動を受け入れてくださる環境が当院にはあります。





2010年冬号

トップインタビュー
鳥取大学医学部附属病院院長
豊島 良太氏

この人に注目
鳥取県立総合療育センター
療育支援シニアディレクター
北原 信氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取大学医学部皮膚病態学講師
山田 七子氏

来たれ研修医!
鳥取県立中央病院

病院探訪
日南町国民健康保険日南病院



2010年春号

トップインタビュー
鳥取県立中央病院院長
武田 倬氏

この人に注目
独立行政法人国立病院機構
米子医療センター院長
瀧副 隆一氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取大学医学部附属病院
内分泌代謝内科（第一内科）
大倉 裕子氏

来たれ研修医!
鳥取大学医学部附属病院

病院探訪
智頭町国民健康保険智頭病院



2010年夏号

トップインタビュー
鳥取市立病院院長
田中 紀章氏

この人に注目
鳥取大学大学院医学系研究科教授/
鳥取大学染色体工学研究センター
センター長
押村 光雄氏

鳥取で活躍する女性医師
智頭町国民健康保険智頭病院内科
渡邊 ありさ氏

来たれ研修医!
山陰労災病院

病院探訪
岩美町国民健康保険岩美病院



2010年秋号

トップインタビュー
鳥取県立厚生病院病院長
前田 迪郎氏

この人に注目
社会医療法人仁厚会
藤井政雄記念病院副院長
・緩和ケア科病棟長
足立 誠司氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取赤十字病院眼科副部長
高橋 芳香氏

来たれ研修医!
鳥取生協病院

病院探訪
日野病院組合日野病院



2011年冬号

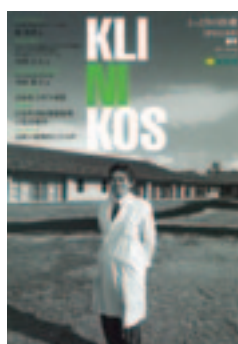
トップインタビュー
独立行政法人労働者健康福祉機構
山陰労災病院院長
石部 裕一氏

この人に注目
自治医科大学とちぎ子ども医療センター
小児科研修医
大谷 英之氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取県立厚生病院外科
田中 裕子氏

来たれ研修医!
日本赤十字社鳥取赤十字病院

病院探訪
南部町国民健康保険西伯病院



2011年春号

トップインタビュー
鳥取県立総合療育センター院長
鱈 俊朗氏

この人に注目
鳥取大学医学部救急・災害医学分野教授
鳥取大学医学部附属病院
救命救急センターセンター長
本間 正人氏

鳥取で活躍する女性医師
鳥取生協病院内科医師
平田 雅子氏

来たれ研修医!
鳥取県立厚生病院

病院探訪
江府町国民健康保険江尾診療所

編集後記

過疎は都会人が作る「数字の罫」ではないだろうか。統計上では医師数も施設数も不足、お産や子供の病気で困る地域もある。いざという時どうなのか。そう思いながら訪れた病院には、人なつこい笑顔、やさしい眼差し、ほだされる語り、元気になる大笑い、先進医療に取り組む精神があった。数字は過疎でも心に過疎はない。医師と患者が町角で「最近どう?」「よくなりました」と会話がはずむ鳥取の医療、過疎とは実は豊かさでもある。

STAFF

発行 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課
(<http://www.pref.tottori.lg.jp>)

編集制作 株式会社メディカル・プリンシプル社
(<http://www.medical-principle.co.jp>)

制作コーディネート 杉浦美奈子

制作協力 Mamasクリエイターズ株式会社

エディター 松田淳

ライター 郷好文(株式会社ことば)、横山奈緒

カメラマン 寺尾豊

KLINIKOS
とっつりの医療
秋号
2011 autumn

鳥取県は県内で働く医師を求めています。

鳥取県は自然豊かで子育てにも最適です。医師としてのキャリア形成も支援しています。



キャリア形成を考えている方へ

- ◆鳥取県専門研修医師支援事業◆
県外の医療機関に県職員として研修派遣します。
- ◆鳥取県医師海外留学資金貸付制度◆
海外留学のための就学資金を貸し付けます。

地域医療に関心のある方へ

- ◆医師登録・派遣システム(ローテートコース)◆
複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。

子育て等で現場を離れ、復帰を考えている方へ

- ◆医療登録・派遣システム(子育て離職医師等復帰支援コース)◆
現場復帰のための研修を県立病院、鳥取大学医学部附属病院等で行います。

県内の求人情報を探している方へ

- 県内の医療機関からの求人情報の提供、医療機関へのあっせん、紹介を行います。(※県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費をお支払いします。)

鳥取県も医師不足！

平成22年に厚生労働省が実施した調査によると、県内の病院では、約170人の医師を求人しています。



鳥取県は民間求人サイト「e-doctor」に特設ページを掲載しています。

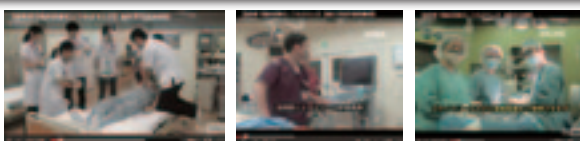
<http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/>

鳥取県 医師確保

検索

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください。

全国の医学生などに、鳥取県、鳥取県の臨床研修病院の魅力について知ってもらうため、ホームページを作成しました。このホームページは、各病院の最新情報や、プロモーションビデオなどがあり、魅力満載です。ぜひご覧ください。



<http://www.tori-rinsyou.jp/index.php>

鳥取県 臨床研修

検索



■お問い合わせ先 鳥取県庁福祉保健部医療政策課医療人材確保室

〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220

電話：0857-26-7195 ファクシミリ：0857-21-3048 E-mail：ishikakuho@pref.tottori.jp